

# ほくと遺跡ものがたり

## 遺跡が語る北斗の歴史 第11回

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間にこの北斗の地で営まれ続けた人類の歩み――コーナーでは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。今回からは、数回に分けて北斗市に数多く遺る箱館戦争にまつわる遺跡や記録について触れていきたいと思います。今回はその前段、箱館戦争開戦前夜までにこのお話です。

これまで、遺跡や史書・記録など、今に遺るさまざまなひとびとの足跡を通じて北斗の歴史について辿ってきたこのコラムですが、いよいよ大きく時代が揺れ動く幕末へと進んできました。

前回は、幕末・開国の時代に築かれた「日本最初の星の城」戸切地陣屋についてご紹介しました。その竣工から約13年後、道南全体を舞台として、古い時代を締めくくり新しい時代へ進むための大きな戦いが約半年にわたり繰り広げられることとなります。それが箱館戦争です。ここ北斗もその戦いの舞台となり、それにまつわる遺跡がいくつか遺っています。箱館戦争とそれを含む戊辰戦争の経緯と時代背景

について、少し時間をさかのぼってご紹介していききたいと思います。

### 1 「江戸幕府の時代」の終焉と、それに抗った人々く戊辰戦争

幕末開国以降、世界の中での日本という「国」の舵取りについて、朝廷を中心に据えながらも、長く続いた幕藩体制を維持しながら両立させる公武合体と、幕府を解体（倒幕）し改めて朝廷のもとで諸侯合議のもと運営する公議政体のいずれをとるかで国内は紛糾します。

時の将軍・徳川慶喜は大政奉還を行い、政治的主導権を返上しながらも「幕府の將軍」の立場を維持したまま諸侯の一人として国政に加わるかたちをとりますが、あくまで倒幕を目指す薩摩藩らによる働きかけの結果、慶喜（1867）年12月9日、京都において幕府の解体を命じる王政復古の大号令が発せられ、加えて徳川家は領地を返上するよう命じられます。幕府側將兵は薩摩藩らの倒幕の動きに長く不満を募らせていましたが、これによりそれは爆発寸前となります。

翌慶喜4（1868）年正月、慶喜は滞在していた大坂城から京都への再上洛を命じられます。この際、慶喜は命令に従い軽装と少数のお供のみで向かうつもりでしたが、怒りに燃える旧幕府將兵ら1万5千人が慶喜の意に反し同行。同月

3日、鳥羽街道を封鎖する薩摩藩兵5千人と押し問答の末戦闘が勃発。ここに、この後約1年半にわたる国内内戦である戊辰戦争の火蓋が切られます。この時旧幕府軍は戦闘が偶発的に始まったため統率が取れず、かつ薩摩兵が朝廷側の証である錦の御旗を掲げたため大きく動揺し、敗戦します（鳥羽・伏見の戦い）。戦線を逃れ江戸に戻った徳川慶喜は朝廷と争う意思がないことを示しますが、新政府軍は天皇のいる御所方向への発砲などを口実に彼ら旧幕府を朝敵とみなし、討伐軍を江戸に差し向けます。

途中、甲州（現在の山梨県）勝沼で甲陽鎮撫隊（旧新撰組）を、野州（現在の栃木県）梁田で旧幕府軍離脱兵（後の衝鋒隊）を撃破し、同年3月に駿府（現在の静岡県）に到達。旧幕府側代表勝海舟と新政府側代表西郷隆盛との交渉の結果江戸総攻撃は免れますが、翌4月に江戸城は開城、慶喜は家督を譲り水戸で隠居となり、ここに265年に及ぶ徳川幕府の歴史は完全に幕を閉じたのでした。

なお、鳥羽・伏見の戦いが勃発した時に旧幕府側について諸藩は徳川家と同じく朝敵として征討の対象となりました。このうち会津藩（現在の福島県）・庄内藩（現在の山形県）については、東北北陸の諸藩が同盟（奥羽越列藩同盟）を結成し赦免を嘆願しますが拒絶されます。

結果、この同盟は新政府軍の「朝敵征討」に対抗する軍事同盟へと変容し、慶喜4年4月～9月にかけて各地で両軍による激戦が繰り広げられることとなります（秋田戦争・北越戦争・会津戦争）。なお、西国でも幕府側諸藩に対し討伐隊が派遣されましたが、そのほとんどが戦わずして帰順し、慶喜3年1月末までにはすべて新政府側に属しています。

### 2 榎本武揚はなぜ北を目指したのか 箱館戦争開戦前夜

こうした王政復古から戊辰戦争へと大きく時代が流れ行く中で、それに大きく抵抗したのが榎本武揚でした。広く海外を遊学して学を修め、幕府海軍の重鎮であった彼は、薩摩藩の新政府における専横に強く憤りかつ幕府解体による旧幕臣らの行く末を深く案じていました。

4月11日、榎本は江戸城開城に伴い命じられた旧幕府軍艦の明け渡しを拒否し、遊撃隊らを乗船させ一部艦艇の占拠に成功します。当時榎本は、この先領地を失う旧幕臣らの行く末として蝦夷地（北海道）開拓をすでに立案していたよう、勝海舟に箱館への艦隊出航を提案して却下されています。彼は安政元（1854）年に実際に自分の足で蝦夷地巡検に同行しており、あるいはその頃から北地防衛・蝦夷地開拓をアイデアと

してすでにあたためていたのかもしれない。

5月、旧幕府徳川家は所有していた全  
国の領地**四百万石**から**駿府七十万石**へと  
大減封されます。これにより数多くの旧  
幕臣が困窮に陥ることは明らかでした。

この対策として、6月に慶喜に代わり徳  
川宗家を継いだ**家達**の名で、収入を失っ  
た旧徳川家臣を平民として蝦夷地に移住  
させ開拓の任に就かせることを求める上  
奏が朝廷になされますが、却下されます。

ここに至ってもなお、榎本は旧幕臣ら  
を救うための蝦夷地開拓の希望を捨てて  
いませんでした。7月ごろから榎本は奥  
羽越列藩同盟と接触し始め、徳川宗家の  
駿府移封が完了するのを見届けた後の8  
月19日、同盟支援を名目に陸軍奉行並・  
**松平太郎**ら幕臣、**彰義隊**ら旧幕軍部隊、  
そして**ブリュネ**らフランス軍事顧問ら  
総勢約2千人を乗せた艦隊を率い江戸を  
脱出、一路北を目指します。

この時榎本は勝海舟に以下のような内  
容の檄文を託していました。

「国が新しい歩みを始めるため、天皇の  
もとに団結し、政体を一新することはよ  
いことで、自分も希望する所である。

しかし、公明正大を謳いながら、現実  
はどうだろうか。新政府は我が旧君徳川  
家に朝敵の汚名を着せ、領地を奪い、家  
臣は住む家を保つ事すらままならない。

あまりにひどく、これもひとえにごく  
一部の強藩（※薩摩藩ら）のわたくしの  
意志によるものであって、天皇・朝廷の  
真意とはいえないだろう。私は朝廷に直  
接訴えたが、みな押し黙り話を聞かない。  
そのため、わたしはここ江戸を去り、長  
くこの国のいしずえとなる一環の事業を  
始めようと思う。これこそが、この新政  
日本をして世界各国と肩を並べる力を築  
くものとなるであろう。」

つまり、榎本らの江戸脱出の目的は、  
(1) 新政府の**薩摩藩**らによる**専横**の打  
破と、旧主君・徳川家など旧幕府勢力へ  
の**不公平な処遇への抵抗とその是正**

(2) 大幅な領地減により行き場を失っ  
た旧徳川幕府家臣らの生きる道として、  
そして新時代の日本の基盤づくりとして  
の（朝廷公認の）**蝦夷地への移住開拓**  
ということになります。

そして、彼らがまず第一に目指したの  
が、徳川家と同じように朝敵の汚名を着  
せられた会津藩らの支援を目的として結  
成された奥羽越列藩同盟との合流でした。

しかし、榎本らが仙台に到着した8月  
下旬の段階で、北越戦線は鎮圧され、秋  
田・会津戦線も敗色を濃くしており、同  
盟の敗北はほぼ決まった状況でした。

榎本は仙台で合流した**土方歳三**らと共  
に軍議に出席し同盟側諸藩に抵抗を説き  
ますが、9月12日について同盟の中心で

あった仙台藩が新政府への降伏を決定。  
榎本らは、仙台で合流した**大島圭介**率  
いる旧幕府陸軍の精鋭部隊・**伝習隊**、洋  
式兵学のエキスパート・**古屋佐久左衛門**  
率いる**衝鋒隊**、**星恒太郎**率いる仙台藩の  
洋式銃隊・**額兵隊**、仙台到着時ほぼ解散  
状態にありながら新隊士らを加え再編  
なった**新撰組**（この時すでに土方は新撰  
組の役職を離れています）などを加え総  
勢約3千人の兵力をもつてさらなる北・  
**蝦夷地**を目指すこととなりました。

榎本が北を目指したのは、もちろん当  
初より目標の蝦夷地の開拓事業の開始で  
あったことともありますが、おそら  
くは当時新政府の箱館府知事を務めてい  
た**清水谷公考**に期待するところが大き  
かったのではないかと私は考えていま  
す。

公考は、当時まだ24歳の公卿の身にあ  
りながら探検家・**岡本監輔**から得た知見  
をもとに慶応4年3月に蝦夷地開拓を朝  
廷に建言。これをもとに新政府は蝦夷地  
に**箱館裁判所**を置き、公考は自らその副  
総督の任につきました。これは現地に赴  
任した官員の中では最高位であり、のち  
箱館裁判所が**箱館府**と名前を改めた際に  
はそのトップである知事に就きます。

若くして自分と同じく開拓の必要性・  
可能性を見抜き、公卿の身でありながら  
自ら遠く蝦夷地に赴任する…そんな公考

ならば、自分たちの理想を理解し、薩摩  
藩らにさえぎられることなく朝廷・天皇  
への橋渡しになってくれるのではないか  
…そうした一縷の望みが、榎本の北行に  
秘められていた、そんな感があります。

明治元年10月20日、榎本ら旧幕府軍は  
**鷺ノ木村**（現・森町鷺ノ木）に上陸。こ  
のうち伝習隊から**本多幸七郎**・遊撃隊か  
ら**人見勝太郎**が「旧幕臣らによる蝦夷地  
開拓」「蝦夷地滞在の許可」について記  
した嘆願書を持って使者として護衛の兵  
士らとともに箱館へ向けて出発します。

しかしその願いもむなしく、「榎本艦  
隊仙台を発つ」の報を受けた時点で箱館  
府側は迎撃の方針を固めており（万が一  
艦隊が箱館に直接入港した際は砲撃が行  
われる手筈でした）、箱館府の常備兵力  
である**在任隊**・**新兵隊**、そして戸切地陣  
屋から派遣された**松前藩兵**と援軍派兵さ  
れた**弘前藩兵**が**藤山村**に集結。10月22日  
未明、隣接する**峠下村**まで歩を進めてい  
た旧幕府軍使者らに対し夜襲をしかけま  
す。ここに、この後約半年に渡る**箱館戦**  
**争**が幕を開けることとなったのでした。

次回は、史料分析によりその詳細な経  
過が明らかになった箱館戦争における最  
初の大規模戦闘・「**大野口の戦い**」（通  
称・**意富比神社の戦い**）をご紹介します。  
（郷土資料館 時田 太郎）